

未来へつなぐ vol.13 | 川本 武彦 |

さいたま商工会議所 副会頭
(株)サイサン 代表取締役社長経営は人を幸せにする為にある
“凡事徹底”で世界に挑む

さいたま商工会議所の2代目会頭を務められた、同社会長・川本宜彦氏の意志を継ぎ、2022年11月より副会頭に就任した川本社長。暮らしに欠かせないエネルギーを供給してきた同社の歴史と、経営者としてのポリシーを伺いました。

終戦から間もない1945年10月。祖父である川本二郎は、日本酸素から独立起業し、川越で「埼玉酸素販売所」を創業しました。戦災に見舞われた首都圏は、まさにこれから復興期。鉄道や大規模建築などの工事用溶接ガスや医療用ガスの需要が急激に高まっていく時代でした。

創業者の先見の明もあって、会社は順調に成長を続けます。そんな中でもターニングポイントとなったのはやはり、1952年からスタートした「プロパンガス (LPガス)」の取り扱いでしょう。まだ都市ガスの整備が進んでいない時代、LPガスは家庭や小規模事業所でも導入しやすい『新しい炎』として注目を集めました。これは伸びると直感した祖父は、大宮の現本社のある一角に、関東で最初のLPガス充てん工場を建設します。そのLPガス容器を、大宮駅前に広げ、街頭で創業者自ら実演販売を行いました。露天商に間違われながらも、新しい事業創造のため、開拓者精神でLPガスを広めていきました。

1960年には、後継者となる私の父・宜彦をアメリカに派遣し、先進的なLPガス事業を視察させています。この時に得た知見は、今なお当社の大きな柱であり、事業の礎ともなりました。

暮らしを支えるエネルギー供給者として 日本から世界に進出

私はサイサンの3代目として、2001年に事業を引き継ぎました。その就任の挨拶で、私は「今後は規制緩和が進む。LPガスだけでなく、都市ガス、電気なども含めた“エネルギー業界”で勝負できる企業に進化したい」と社員に伝えました。そして2003年には、エネルギー事業を総称する「ガスワン (Gas One)」というブランド名を作りました。

この名には「お客さまにとって最も身近なホーム・エネルギーパートナー」になる、という目標を込めています。当時、電力会社はオール電化を盛んに進めていましたが、その後に起きた東日本大震災や、最近の電気代の高騰からもわかるように、一つのエネルギーに依存した暮らしはリスクも高くなります。よって、お客様の暮らしにあった様々なエネルギーを総合的に供給できる、エネルギーのベストミックスを担える会社になろうと考えたのです。

このビジョンを共有できる、全国のLPガス会社をグループに

招き入れ、Gas Oneグループの規模は拡大しています。また、電力自由化にあわせて“エネワンでんき”を立ち上げ、電力小売事業・メガソーラー事業にも進出しました。さらに近年では、アジアを中心とした海外でのLPガス販売が好調となっており業績を伸ばしています。LPガス容器に詰めて持ち運びでき、環境にも優しいエネルギー源であるLPガスの需要は世界的にも高く、まだまだ可能性が広がる市場だと期待しています。

創業 100 周年には一兆円企業へ 家族のように大切な社員と挑む

当社は創業当時から大家族主義で「会社とは、経営とは、人を幸せにするためにある」という信条を、祖父と父から引き継いでいます。社員とその家族は、たいせつな仲間であり、彼らを家族のように想い、幸せにすることが、会社の成長にもつながっていると考えています。

こうした、いわば幸せの循環を起こすために掲げた社員綱領が「凡事徹底」です。日々の小さな努力や成果の積み重ねが、より良い会社への一歩となる。私はそう信じています。

当社は2045年に、創業100年を迎えます。まだまだ先のこのようですが、この時にはグループ売上1兆円を達成し、我が国を含め、アジア・太平洋地域において“総合エネルギー・生活関連事業”でリーディング企業になると、標榜しています。

目標は高く明確ですから、そこに向かって果敢にチャレンジしていきます。

川本 武彦 (かわもと たけひこ)

1964年、さいたま市大宮区出身。1988年、玉川大学工学部卒業後、矢崎総業(株)に入社。アメリカ矢崎への出向などを経て、1995年(株)サイサンに入社。2001年先代・川本宜彦氏より事業承継し、現職。(一社)全国LPガス協会執行役員理事、日本液化石油ガス協議会副会長、(一社)埼玉県LPガス協会会長、(一社)埼玉県障害者スポーツ協会会長、さいたま商工会議所副会頭などの要職にある。



おなじみの「ガスワン」の緑のマーク。LPガスの容器は日本のみならず、インフラの整っていない海外でも販売され、頼もしいエネルギー源となっている。